

「^ヒ零」の説明

「^ヒ零」とは万物の根本資料であり、時空にも先立つ「実在」である。

唯一無二の「極」なる「^ヒ零」を「大宇宙の大中心」と云う。
この「極」なる「^ヒ零」を中心として、「無宇宙」の中に築き成された「実在」は「宇宙の中心」であり、これを神名としては「天照大御神」と云う。

注：「築き成された」とは、その箇体を構成するすべての要素・資料が正しく整理された（即ち「^{すりかためな}修理固成された」）結果を指す用語であり、こうした完成された体を称して「カミ」と云う。

アマテラスオホミカミ

天照皇太御神（境地）

ヒ
○ 境地

タカミムスヒノカミ

高御産巢日神

作用

ヒノカミ（カウリミ）として

アメノミナカヌシノカミ

天之御中主神

カミムスヒノカミ

神産巢日神

（人間身では本来

祭ることができない。）

コトアマツカミとしての神名

（雲の神・カウリミ）

タカミムスヒ タカギノカミ

高御産巢日高木神

ヒカリ

○

アメノミオヤ アマテラスオホミカミ

天祖・天照大御神

（伊勢神宮の

内宮の祭神）

カミムスヒ ミオヤノミコト

神産巢日御祖命

アマツカミとしての神名

（雲の神・ウツシオミ）

ミヅガキ垣
（瑞垣）

タマノカミ として

ツキヨミノミコト
月読命

アマテラスオホミカミ
天照大御神

タケハヤスサノヲノミコト
建速須佐之男命

（家庭祭祀における祭神）

ウブサテノカミ
産土神

ウニツカミとしての神名

（魂の神）

ミマモリノカミ
鎮守神

コトアマツカミ 零の神 (カスリミ)

アマツカミ " (ウツシオミ)

ウニツカミ 魂の神 以下、すべて、

↓ ミツガキ
瑞垣以下は、時間・空間という枠組みの中。

三貴子を始めとする、多くのアマツカミは、

しばしば、そのままに時空の内部に降りて来て、

ウニツカミとして働く。

人間の身では、アマツカミをそのままに^{ヲカ}拝みまわることとは
とても困難なので、

マハシラにおいても、魂の神 として表れた三貴子を祭る。

2020.2.18.(火)

NO.

DATE

ヨモツクニ
素材領域

ナカツクニ
箇体領域

ヨモツクニ
素材領域

無^ヒ宇宙
(極大極小の火)

直日

瑞垣

宇宙

奇

同下

2

幸

大被

普通は省略してこう
表記するが、実際には、
A→Bの2段階

3

真

④

より粗雑な部分は <
そのまま火に焼かれ
ハラへの対象となる。

より精妙な部分は
紐の直とれて、
上のミシマへ。

4

荒ん

(尽天尽地の火)^ヒ

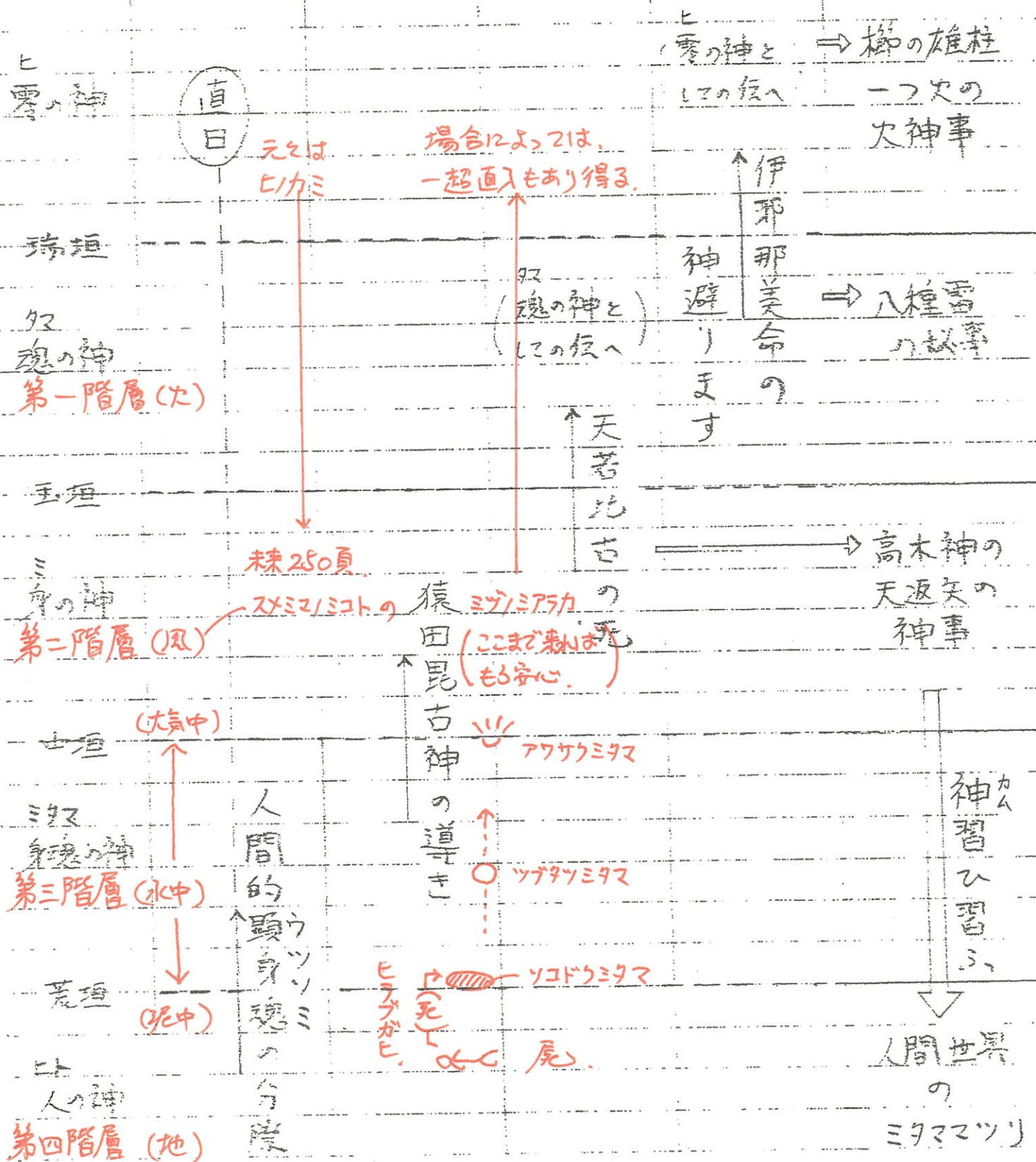
(幸114頁より)

コト アマツ カミ	ヒ 零 (大中心)	ミ (ミコトの体)	
	!		無 宇宙
ア マツ カミ	ヒカリ ● (西口)	神界の真理 とこの 神慮同凡の御鏡 (ミコトの用)	(高 天 原)
			↑
	1. —	ミスマルミタマ 統一魂 とこの	ウシミタマ 身魂
ウ ニ ツ カミ	2. ミタマ 身魂	3. 4.	あくまでも 「完成された」 状況での話

これが「完成された」状況と
指して「国常立尊」という。

図表：神の死と人の死

ヒ 零の神 (直日)	(直日)		ヒ (零の神と しての伝へ)	⇒ 櫛の雄柱 一つ火の 火神事
瑞垣			↑ 伊邪那美命の 神避ります	
タ 魂の神 奇身魂		タ (魂の神と しての伝へ)		⇒ 八種雷 の秘事
玉垣			↑ 天若比古の死	
ミ 身の神 幸身魂		猿田毘古神の導き		⇒ 高木神の 天返矢の 神事
中垣				
ミタ 身魂の神 真身魂	人 間的 ↑ 顕ウ 身ツ 魂ミ の分 際			神カ 習 ひ 習 ふ
荒垣				↓
ヒト 人の神 (肉体身)				人間世界の ミタマツリ

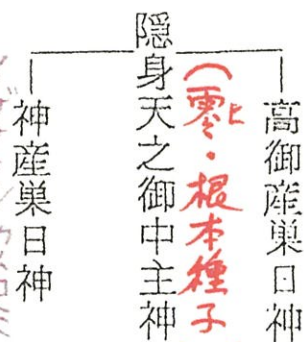


大宇大宙の大中

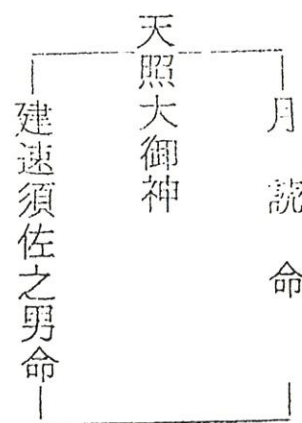
宇宙(時空)全体の中

人類世界(地球)の中心

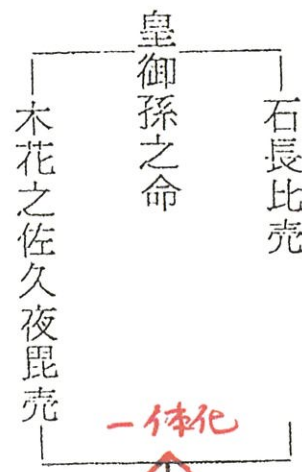
はてしと神の零



はてしと神の魂



はてしと神の身



一体化

と称

へまつるが如く經に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては

葦原醜男

意富耶馬台須米良岐美と称へまつるのである。

理想上の天皇

八重事代主

大國主の息子

人間身(皇太子)

天皇自身は人間身ではあるが、皇御孫之命の諸力を正しく継承し「人類世界の中心」として機能することによって、オホヤマトスメラギミと称えられるべき存在となり、アシハラシコラとヤヘコトシロヌシの諸力をも行使できるようになるのである。

ところがその国は本来神魔包括の○の神であるから時あつては神とも成り魔とも変わるので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。アシハラシコラは生大刀・生弓矢で八十神を

阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御

現はしますことと拝承します。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の跡にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

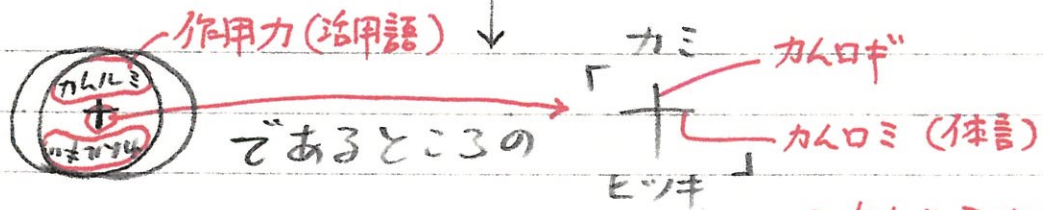
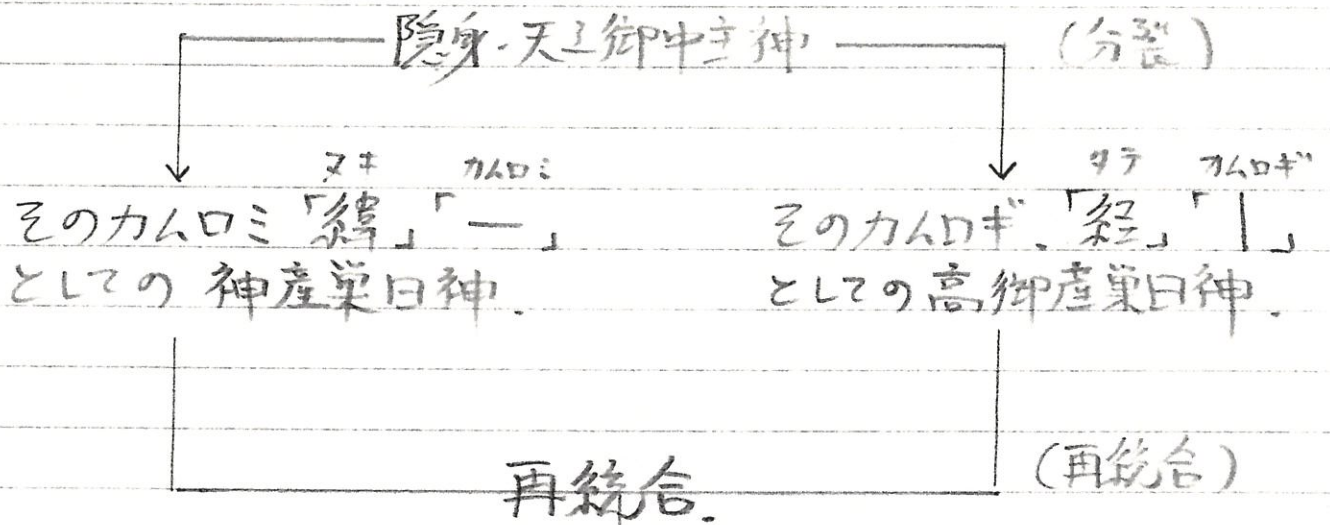
図表：神の死と人の死

ヒ 零の神	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿			ヒ 零の神と しての伝へ	⇒ 檜の雄柱 一つ穴の 穴神事
瑞垣				幸265頁で言う、	第四章
タ 魂の神			タ 魂の神と しての伝へ	伊邪那美命の 神避ります	⇒ 八種雷 の秘事
玉垣				天 名 比 古 の 死	
ミ 身の神			猿 田 毘 古 神 の 導 き	第七章	⇒ 高木神の 天返矢の 神事
中垣					
ミタ 身魂の神		人 間 的 顕 身 魂 の 分 際			神習ひ習ふ、
荒垣					
ヒ 人の神					人間世界の ミタマツリ

未来250頁の図「ヒノカミとしては」の説明

未来230

『この「^{カミ}十」と結び結ぶ（元としての）^{ヒノカミ}隠身』



即ち、「ミオヤ」と称ふる「加徴」
アノミオヤ ヒノカミ
⇒ 天祖 や 日神 を意味する。

・カムルミカムルギの作用力によって、カムロギとカムロミは正しく結合している。

典型的には(ヒノカミとしての)天照大御神

→ 基本的には『こうした「二つのもの」への分裂と

その再統合』というプロセスを経て、ヒノカミ→タマノカミ→ミノカミ
と「組み直されて」ゆくのである。

第二階層から無宇宙への「一起直入」の作用力を象徴して、
「天返矢（アマノカヘシヤ、アメノカヘリヤ）」と言う。

コトワマとしては、マトモヤモ 極である点を表す。

この点とは、極大極小極無極の点、である。

（日本天皇道）

別稿では、これと、神の^ヒ霊、○なる点、点無きの点、
などと表現している。

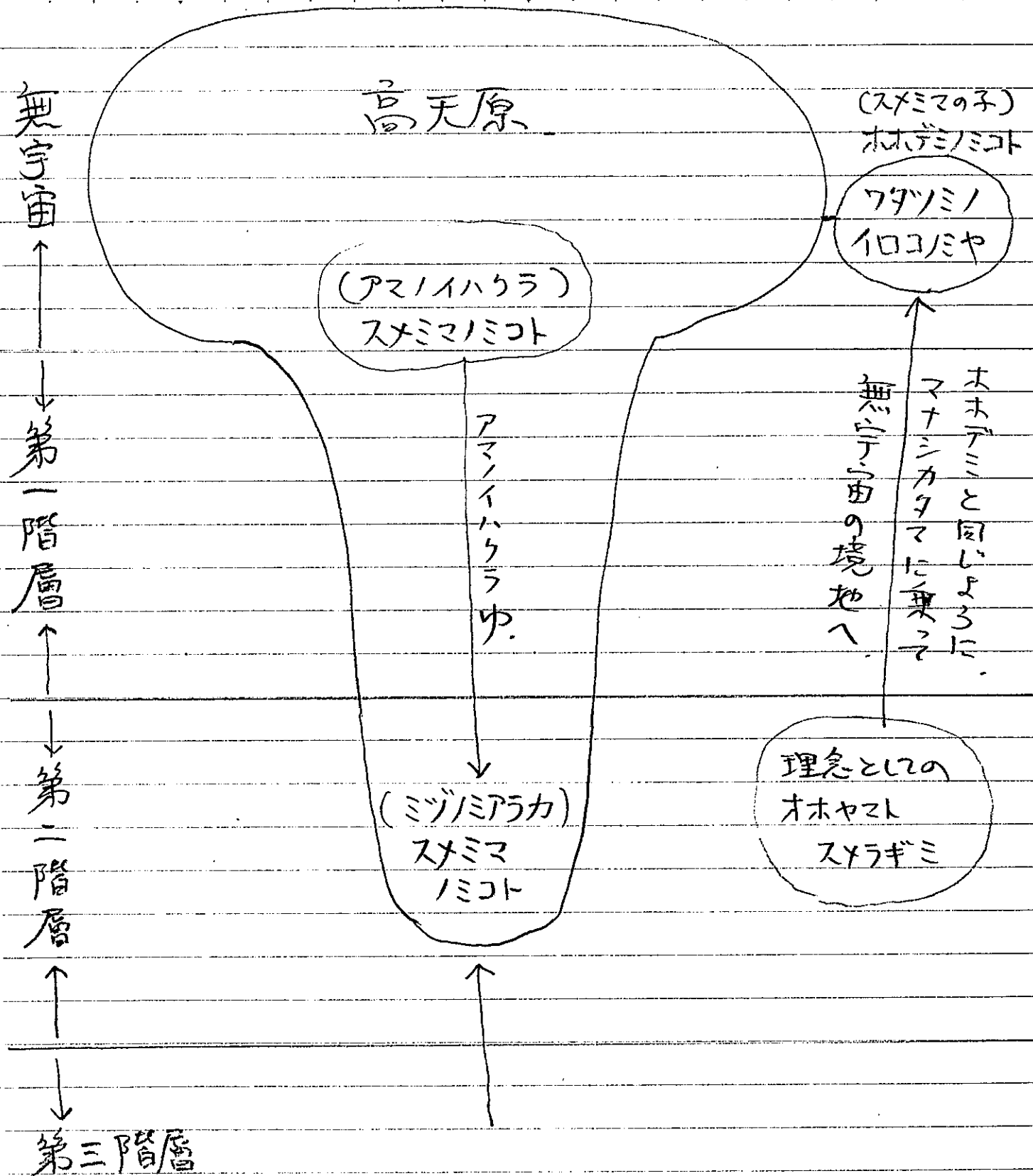
また、これらの充満する領域を指して、

イザナギノカミ の築まじしたる高天原、 とか、

天御中主神 の統治する天御中主大御神 なり皇土 とか、

天照皇大御神、 とか

月読命なり夜食国、 などと表現している。



天照皇大神御神

祖神

多田山公秘稿

常陸風土記に「祖神尊」とあり。

今時の學者中には、祖國と並べて祖神と云つてあるのは祖先の國と祖先の神と云ふが如くでもある。

歴史的には、祖先の國と云へば民族として建設し經營したのであり、祖神とは民族として當初奉祀信仰した神を指すのである。

けれども、それは私有したる神と云ふに等しいから偏執固陋の見であり、荊棘細徑、大道を没却せるものである。

日本の古典には、伊耶那岐命伊耶那美命二柱神・天祖天護日天狹霧國禪日國狹霧尊・天祖・陰陽・天地・天津神國饒天忍神諸命・尊・天饒國饒天忍穗耳命・天津神饒天津磐境・高天原千木高知底津磐根宮柱太敷坐・修理固成・等と記載し、現今使用の言語としては目・女・

陰・凹・芽・等が存つて「ミオヤノカミ」の義を傳へて居る。茲に云はんとする祖神とは、「ミオヤノカミ」なる日本語に充當てたのである。

「ミオヤノカミ」とは、身・實・稔・充實・三・産出・産靈・胎兒・にして神魔同凡の體なり用なるのであるから、日止であり火人であり人であるのである。

日本書紀に「天地未生之時。

譬猶海上浮雪無所根係。其中生一物。如葦牙之初生壟中也。便化爲人號國常立尊」と記したる「人」とは則「女・陰・凹」で凹と支那人の傳へたる「フ・二・經・最小」なのである。

之れを象形的に指示したのが「人」の字で、之れは人身相續の象徴なので、陰陽合体の義である。

「ミナノガハ」「ミナセガハ」

の語が有つて現今も地名とされて居る。

水無瀬川・女男川・の如きが

それである。

ハ」「アマノカハラ」「アマノヤスカハ」「ヤスノカハラ」などと傳へて「タカマノハラ」で白玉光底泉聲潺湲とは「アマノカハラ」の「カミカカリ」で、「あちめあうを」と傳へてある。

「アマノカハラ」とは天照大御神の鎮坐すところであることを古事記に「爾其矢（かれそのやは）。自雉胸通而（きぎしのむねをとほりて）。逆射上逮坐天安河之河原天照大御神高木神之御所（さかしまにいあげたれば、あまのかはらにまします、あまてらすおほみかみ、たかきのかみのみもとにいたりたり）」とあるが如く、天照大御神の國土で高天原であるから「賜天照大御神而詔之。汝命者所知高天原」と古事記に載せたのと對照すれば「タカマノハラ」が「天安河（アマノヤスカハ）」で天照大御神の統治したまふところであることは明瞭で「メ・陰・女・陽・芽・目・凹・孔・穴」で「天照皇大御神」と称へまつる「宇・宇・宇・宇・宇・斗・宇斗・宇」で母胎で天安河・天河原・皇土・白玉・天漢・天津磐境・太邇邇等と傳へてある。

古事記に「爾天神之命以（かれあまつかみのみこともちて）。布斗麻邇爾ト相而詔之（ふとまににうらへて、みことのりしたまはく）。因女先言而不良（をみなさちだちしによりて、ふさはざりしなり）」とある。

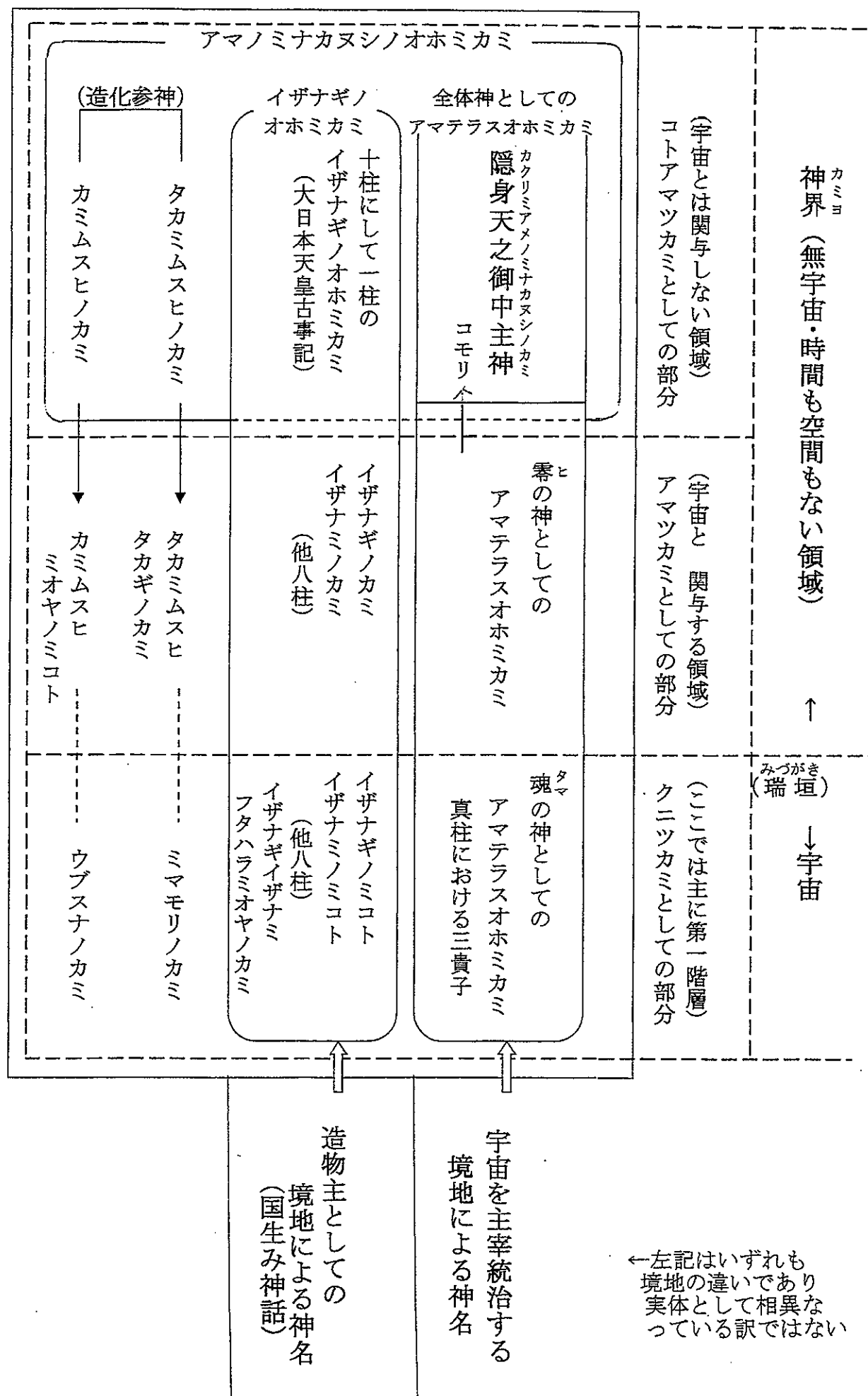
ここに「天神之命（あまつかみのみこと）」とあるので天神の神勅と云ふ意味だが、天津神之命であるから國津神ではない。國津神とは尊なので宇宙の主である。

之れを基督とは西部亜細亞地方の傳へで、日本にては「神人・神聖・人・伊耶那岐命伊耶那美命二柱神・日本天皇」にてましますから、天照大御神とは称へまつらずして等しく大日靈貴尊と曰しまつるのである。

神にてましませども其の御相を異にしたまふが故に御名もまた異なるのである。

オホミカミ（全体神）の一覧
（タカマノハラ構造）

多田流 オホミカミ（一）（二）



あまてらすおほみかみ

あまてらすおほみかみ

あまてらすおほみかみ

三神即一身

如是神魔

体ナリ

用ナルナリ

昭和元年二月廿一日正午

山崎



高天原と零神と「ヒメの秘事」

「ヒメ」 (「メ」、母胎、イノチ)

『磐境としての高天原』

天照皇大御神 (天御中主大御神) → ○神

「極大極小のヒ」

「大宇宙としての高天原」の主神 ↓ 日神

即ち天照大御神 (天之御中主神)

↓ 高天原を治らす

大宇宙の大中心

宇宙の中心とは別、箇体の中心を築き成すその元となる一点のこと

「母胎としての高天原」における資料

即ち月詭命 (天照坐皇大御神)

↓ 夜食国を治らす

「小宇宙 (箇体) としての高天原」

即ち素盞男尊

(天鈿女尊としての天照大御神)

↓ 海原を治らす

太陽で象徴
(天で魂)

月球で象徴
(天で地で魂)

山祇神と海津見神
(地で魂)

神 名	内 容	別 名
アマテラススメオホミカミ 天照皇大御神 (境 地 ○ ヒ)	イハサカ 磐境としての高天原 母胎	アマノミナカヌシノオホミカミ オオヒシルメムチノミコト
アマテラスオホミカミ 天照大御神 (実体 ⊙ ヒカリ)	(大宇宙としての) タカマノハラ 高天原の主神	カクリミ コトアマツカミ アメノミオヤ 隠身、別天神、天 祖 アメノミナカヌシノカミ 造化三神、二柱御祖神 三貴子 他多数
ツキヨミノミコト 月 読 命 (活用 ㊦ ヒトツ)	その母胎における資料 およびその活用	アマテラシマシマススメオホミカミ 天照坐皇大御神
スサノヲノミコト 素 戔 男 尊 (再び実体 ⊙)	(小宇宙としての) 箇体としての高天原	アメノウズメノミコト (天 鈿 女 尊としての) 天照大御神

大宇宙に遍満する「^ヒ零」には、以下の三通りの性質が
内在している。

1. ^ヒ○ ^{さかひ}境地 (外郭、位置、^{ヒカリ}○なる実在、を悟證すべき境地)
この「境地」を ^{アマノミナカヌシノオホミカミ}天御中主大御神 と称する。
^{アマテラススメオホミカミ}(また、天照皇大御神とも)

2. ^{ヒカリ}○ ^{ありてあるもの}実在 (中心と外郭とから成る統一体)
この「実在」を ^{アマテラスオホミカミ}天照大御神 と称する。

3. ^{ヒトツ}㊦ ^{はたらき}活用 (^{ミコウミ}御子生み や ^{スリカタメナス}修理固成 の作用)
この「活用」を ^{アマテラシメシマススメオホミカミ}天照坐皇大御神 と称する。

→ 以上は、共に「^ヒ火」で「^ヒ零」で「^ム無なる^ウ有」で、

「修理固成の天沼矛」である。

故に今假に大宇宙の大中心と呼ばん。

大宇宙の大中心とは一圓にして一音なれば、宇宙にあらず、宇宙の中心にもあらずして、宇宙を築き、宇宙の中心を成する一點にして「ヒ」なると共に「メ」なるなり。

之れを「ヒメ」の祕事となすなり。

「メ」とは母胎にして、女陰にして、国土にして、家にして、磐境にして、神命なれば「イノチ」なり。

目なり、芽なり、女なり、命（いのち）なり、生死遷流なるなり。

故に「メ」とは「アマテラススメオホミカミ」にして、「ヒメ」とは「アマテラスオホミカミ」にてましますなり。

之れを「イスズヒメ」と称へまつるは「ヒメカミワザ」の「ヒメコトタマ」にして、「カミノコトタマ」なる極大極小の「ヒ」な

るなり。

「ヒメ」にして「ヒ」なるなり。

故に「イザナギノミコトイザナミノミコトフタハシラノカミ」と称へまつれば「大宇宙の大中心としてのカミ」なりとの義にして、「イザナギイザナミフタハシラノカミ」と称ふる時は「善惡美醜正邪曲直判別の神徳」との義にして、「イザナギノカミ」と称へまつるは「神界築成の神徳」との義なるなり。

其の然るは「カミノコトタマ」の然るなり。

人間造作の名称ならざるは固よりにして、人間歴史上の人身の身魂としての神徳なりとの義にもあらざること、また固よりなり。

されど、人間歴史上の人身としての身魂が「カミノコトタマ」としての神徳を顕彰すること、また固より當然の事理なるなり。さればとて、某甲の死後、其の身魂が「イザナギノカミ」にして、或は「アマテラスオホミカミ」にして、亦是「カツラギヌシノカミ」にして、又或は「ニギノミコト」にてましますと

云ふにはあらざるなり。

人身としての身魂が大宇宙の大中心に歸入したる暁は、生死を隔てずして直に「カミ」たるの御徳を顕彰するが故に、「イザナギノカミ」たり、「アマテラスシマススオホミカミ」たり、「アマテラスオホミカミ」たり、「アメノミナカヌシノカミ」たり、「カツラギヌシノカミ」たり、「ニギノミコト」たること、一音琅琅として邊際無く一圓晃耀として極無極なるなり。

(前略)

フタリとは二(ふたつ)であるから日(ひ)と書くので㊦と玉篇にしるした太陽で、太陽の象形で㊦で(ひ)で、其の實在を指示して㊦と書くので、中央の一點は中心を指した指事である。

故に○は外郭で位置で空間であると共に㊦(ひかり)なる實在を悟證すべき境地である。

此の境地を、天御中主大御神(アマノミナカヌシノオホミカミ)と称するのは、人が人に説明するのではなく、天御中主大御神が此くと教へ給ふから人は之れを信奉して此くと称へまつるのである。

○(ヒ)は境地(さかひ)で天御中主大御神(アマノミナカヌシノオホミカミ)。

㊦(ヒカリ)は實在(ありてあるもの)で天照大御神(アマテラスオホミカミ)。

㊦(ヒトツ)は活用(はたらき)で天照坐皇大御神(アマテラシマシマススメオホミカミ)と称へまつりて、共に火で零で無(ム)なる有(ウ)で、修理固成の天沼矛(あまのぬほこ)である。

火(ヒ)で経(フ)で身(ミ)で火経身(ヒフミ)で、三(ミ)で一(ヒ)で二(フ)で、無限で有限で如是で這である。

このままに このよは あれど、このひとの こころこころに こをろこをろと。

這は教にあらず。

アマノミナカヌシノオホミカミとたたへまつるは、みづからが天御中主大御神となるのであるといふよりは、其の言が直にアマノミナカヌシノオホミカミなのであるから、この言を觀れば、みすがたで一圓光明體である。

この一圓光が人に應現する時は、其に相應じたる色彩・形状活動乃至言論・文章・絵画・彫刻・音楽等と成るのである。

それ故に其の人の作品は何なる場合にても其の人である。

(後略)

「命」より

高天原を治しめすは天照大御神にして又、天照皇大御神なると共に天照坐皇大御神にたましますのである。

月讀命とは月夜見・月弓・月讀命と教へられてある如く、母胎（はは）に於ける資料であるから、之れを塩土（しほつち）と称して食國（をすくに）である。

現云ふところの國家（くに）としては、領土・財産・國民・民族・立法・司法・行政と云ふが如き一切の機構を指して名稱けたので、夜の食國とは、其れ自身としては獨立せざるものである、物資なのである。

内閣総理大臣と雖、内大臣とか掌典長とか云ふとも、悉皆、資料である、資料として天皇に奉獻らねばならぬので、奉獻りつつあるから、其の位置に居るのである、居ることができるのである。

之れを支那文字で書けば魄である。

魄は地に歸ると云つてあるのは陰なりとの意味で、月球をして人間身は其の代表と認めたのである。

である。

月讀命は陽示（をとこかみ）とにてましますと教へられてあるのは、荒身魂にてましますとの意味で、陰即陽（めでめ）で陽即陰（めでめ）で、女（め）で芽（め）で目（め）で命（いのち）で、生死遷流で、一切（すべて）の事象（こと）で、真理（すぢみち）で、天（あめ）で地（つち）で上で下で腹で背で中心（しん）で枝葉で、君（きみ）で民（たみ）であるから天照坐皇大御神にたましますのである。

（佛教云ふところの一字金輪大日如来で、不動明王であると共に、觀自在佛にてましますのである。）

ツキヨミノミコト

月讀命

母胎における資料（と、その活用）

即、天照坐皇大御神（天にも地にも）

ヨルノラスラニ

夜食國

それ自身としては獨立せざるもの、物資、

（漢字で書けば、魄）

月讀命は伊邪那岐命が祓禊の事を
行ぜられて右の目を洗はれた時におうまれになられた神
に、日神とおならびになつて夜
良國を治しめす天命を有せらる
のである。

夜食國と云ふのは日に対する
で、盈虧の義で、干満を知る
ころの潮と同じである。

生死遷流變転出沒を指示した
ので、宇宙は成住壞滅の物では
あるが、水と波との如く起伏す
ると云ふまで、固着凝結と見る
のも実は人の身のはかなき迷ひ
にある。

然れども、人は時間のうちに
生き、空間のうちに動く。

生きつつ、動きつつ、心樂し
く世を安らかに経過せんことを
欲するので、相互に道德倫理を
守らねばならぬものと規定す

るのである。

随つて因果応報をも教へ、諸
惡莫作衆善奉行と勤むるのであ
る。

けれども因果が無いのではな
い。

医者は病苦をうつたふるもの
に鎮痛剤とか麻睡薬とかの注射
を為ることがある。

麻薬は病患を癒すのではない

が、患者はその薬のたぐひを
を忘るることができず、苦痛を

忘れて仕事を為て居るうちに、
病氣もまた治つて健康体となる
ことができる。

忘るるといふことは実に不
思議である。

人の身に睡眠の有るのを思へ
ば、天国楽園とは夫かと考へら
るるではありませんか。

月讀命 夜食國ヲ統治ス。

月夜見の矢は、よのをすくに
をしらしめすなれば、つきやみ

のかみわざをもちせたまふと
もに、つくゆみのかみかかりを
さづけたまふのである。

其の「つきやみのかみわざ」
とは因果応報の義則で「つくゆ
みのかみかかり」とは一超直入
如来地の神通力無量力である。
有にあらず無にあらず、有無の
間にあらずして生滅起伏す。

う。
ああひがてんじんゆうあい

因果無きにあらず。

応病施薬南無薬師如来。

因果有るにあらず。

唯此の衆生を愛して南無無量
力吼如是天地を碎きて衆生を救
出し給ふ。

如是天地白玉楼

破顔呱呱莞爾来

单身錦衣隠乎去

西東北南悠遊無辺。

心して我は行かなん朝夕に
神の心を心とはして。

多田山公秘稿

「ミソギのたより」は五年前に木原さんの発意で配布を始めその後、生尾さんも共に助けてくれたものであるが、第三十八回を安東から出したままで、あとは原稿が四回分残って、昨年八月の終戦から一ヶ年半にならうとして居る。

今改めて「未来」と名づけ、此の短文を續けることとします。何分にも大変動のため、同人皆様方の御住所も大半変られて連絡がつきませんから、どうぞお知り合せの方方を私にまでお知らせ下さるやうお願い致します。

第一

「十字架」の信仰は極度の愛と忍辱とを教ふると共に憎悪と泰慮との極を示すものである。

色に執へてある。

その中に「火遠理命（ホフリノミコト）天皇行（ギヤウ）」の傳へがある。

けれども古典の大半は神話の形式を採つて居る爲に、讀者が兎角その眞意を見落しがちである。

「ホフリノミコトはシホツチノオチのカガミノフネに

のりタマのキドにはいられた。そのキドはタマばかりでそのタマのひとつひとつにヒがもえてをる。

その（ヒ）は永劫不滅の日で不断起滅の火で極大無限の零で極底最下の氷で無盡無量の一である。

従つて是れは唯一で無限で最大で最小で無で有で空で実で大宇宙と呼ぶるのである。

今その（ホフリノミコト）がタマのキドに「はいられた」とあるのは（箇躰が箇躰の中に入

て見ると（ヒ）てあつた」との意味で（本来の我を覺り來つた）ので（極）を明らめ得たのである。

その（極）を明らめ来れば、あや奇（クス）しくもあや畏くもアマテラスオホミカミツキヨミノミコトタケハヤスサノヲノミコトにてまします。

斯く悟證し給へるは（神の獨子（キリスト））則（神（エホバ））である。

神の子が此の土に在るは神の國を築き成さんが爲である。是う云ふことで火遠理命には火火出見命（ホホデミノミコト）として天皇國築成の神業をとられたことと拜承しまつらるるのであります。

三つ粟のその中粟の粟の實のあや美しき裏表かな。

その（ヒ）が永劫不滅の日だと云ふのは、萬有本来陰陽不測の神（シン）だと云ふことで、則〇で凹凸で天地で卑高で神魔で、そのの不一不二なる躰であり用であるとの意である。

不斷起滅の火だと云ふのは、人の目には有るとも見えぬ中から燃えて燃えながら、また鎮まつてまた燃えて、有るとも無いとも判別し難くて、萬有を焼き盡し、萬有が成立しつつまた壊滅しつつ連環の端無き球であるとの意である。

極大無限の零だと云ふのは、萬有悉皆崩壊を免かれぬから發き發いて空しきに歸するのだとの意である。

極底最下の氷だとは、八寒地獄の釜の底を打ち割ればまた分割することの出来ぬ極微であるとの意。

無盡無量の一だとは、流行轉換して極り無き時間と空間との中に各自各自の極限を示して居るとの意である。

此れが有るから人は此の中に人相應に（極）を明らかに、その神を拜することが出来るのである。

その極を明らかに得た時に「我は神の獨子である」と體得悟證するので、之れを「神の人」なる「基督」と讚美するので、それは太古以来、中央亞細亞以西の地に行はれた「十字架」の信仰で○（カミノヒト）だとの義である。

エスは身を以つてそれを悟證した神人として名高い一人である。

以上

昭和二十一年十二月二十一日

多田雄三山谷 敬白

る。之れを、

人の世では「聖」と呼ぶ。則、「カミ」である、我の内に拝む神であると共に、内外不二に拝みまつる

「天皇」にてまします。

カミノイノテハハテモナシ
聖 寿 無 窮。

之れは単なる讃へ辞でも祝ひ詞でも希望の詞と云ふのみでもない。まことに宇宙の事実で真理なのである。太古以来、その聖なる人類は此の事実を明らめ得て、此の真理の上に国を建てたので、それは「神聖国祚」であつた。

その国は穢れ無ければとて「土」と書き「穢土」と區別したのは注意深き支那文字の成立である。形に書けば○である。或は□とも描く。之れを日本語ではアマと呼ぶ。空なのである。「天」であり、「海」であり、「女」である。

「ア」は発ぎ発いて、果て無く限りの無いのであり、「マ」は円満具足であるから、「アマ」とは大宇宙の義で、都べてのものの産出者で、祖である。則、母胎で空界で零境である。之れを「イヘ」と呼ぶ。

此の○には不断起滅の火が有る。その火の燃ゆるを見て、○の中に一点を点ず。則、○である。「いへのあるじ」で「光」である。「不断起滅の火」であるから即「一点不滅の火」である。

一点不滅の火は、則、無尽無量の水で、それがそのまま無際無涯の身であり、身も無く境地も無い心である。

それは身でもなく水でもなく火でもなく心でもないところの○であるからとて、古老は、

ヒフミヨイムナヤコト
一二三四五六七八九十と称へて、円満具足の箇躰だと讃美したのである。

第一 故郷編

第一章 十字架の信仰

「十字架の信仰」と云ふと多くの人はキリスト教とばかり早合点をするかも知れぬ。けれども是はそれより遙かに古く行こなはれたもので極度の愛と忍辱ニンニクとを教ふると共に憎悪と暴虐との極を示すものである。その極を日本の古典は色色に教へてある。その中に「火遠理命天皇行ホヲリノミコト」の伝へがある。

けれども古典の大半は神話の形式を採つてゐる為に読者が兎角その真意を見落しがちである。

「ホヲリノミコトは、シホツチノオヂのカガミノフネにのりタマのキドにはいられた。

そのキドはタマばかりでそのタマのひとつひとつに(ヒ)がもえてをる。

その(ヒ)は永劫不変の日で不断起滅の火で極大無限の零で極底最下の氷で無尽無量の一である。従つて是れは唯一で無限で最大で最小で無で有で空で実で大宇宙と呼ばれるのである。今その(ホヲリノミコトがタマのキドにはいられた)とあるのは(筒体が筒体の中に入イつて見れば(ヒ)であつた)との意味で(本来の我を覚り来つた)の(極)を明らめ得たのである。その(極)を明らめ来たればあや奇クスしくもあや畏くも(アマテラスオホミカミ ツキヨ

ミノミコト　タケハヤスサノヲノミコト）にてまします。

斯く悟証し給へるは（神ノ独子）則（神）である。神の子が此の土に在るは神の国を築き成さんが為である。」
是う言ふことで火遠理命には火火出見命として天皇国築成の神業をとらせられたことと拝承しまつらるるのであります。

三つ栗のその中栗の栗の実のあや美しき裏表かな。

その（ヒ）が永劫不変の日だと言ふのは万有本来陰陽不測の神だと云ふことで則④で凹凸で天地で卑高で神魔でそれの不二一なる体であり用であるその意である。

不断起滅の火だと言ふのは人の目には有るとも見えぬ中から燃えて燃えながらまた鎮まつてまた燃えて有るとも無いとも判別し難くて万有を焼き尽し万有が成立しつつまた壊滅しつつ連環の端無き球であるとの意である。

極大無限の零だと言ふのは万有悉皆崩壊を免れぬから発き発いて空しきに帰するのだとの意である。

極底最下の氷だとは八寒地獄の釜の底を打ち割ればまた分割することの出来ぬ極微であるとの意。

無尽無量の一だとは流行転換して極り無き時間と空間との中に各自各自の極限を示して居るとの意である。

此の（ヒ）が有るから人は此の中に人相応に（極）を明らかに明らめてその神を拝することが出来るのである。その極を明らかに得た時に「我は神の独子である」と昧得悟証するので之れを「神の人」なる「基督」と讃美するのでそれは太古以来中央亜細以西の地に行はれた「十字架の信仰」で④だとの義である。

イエスは身を以つてそれを証明した神人として名高い一人である。

内容的には、『無宇宙の零ヒが同じ零ヒであるにもかかわらず、人間の眼には、様々な相スガタに見えるので、人間はそれぞれの相スガタにそれぞれの神名を当てている』ということを文学的に表現した文章である。

即ち、「同じヒ」であっても、その「ヒ」が

1. 世界を焼き滅ぼす火ヒであれば、建速須佐之男命と呼び、
2. 変幻出没の怪奇な火ヒであれば、月読命と呼び、
3. 万有を化育する純愛の日ヒであれば、天照大御神と呼ぶ。

それぞれの神性にそれぞれの神名があるけれども、それらの神は、皆実体としては「ヒ」であり、究極的には、同一の「実在」なのだということが、書かれているのである。

未来 (一)

多田山公秘稿

「ミソギのたより」は五年前に木原さんの発意で配布を始めその後、生尾さんも共に助けてくれたものであるが、第三十八回を安東から出したままで、あとは原稿が四回分残って、昨年八月の終戦から一ヶ年半にならうとして居る。

今改めて「未来」と名づけ、此の短文を續けることとします。何分にも大變動のため、同人皆様方の御住所も大半変られて連絡がつきませんから、どうぞお知り合せの方方を私にまでお知らせ下さるやうお願い致します。

第一

「十字架」の信仰は極度の愛と忍辱とを教ふると共に憎悪と暴虐との極を示すものである。

その「極」を日本の古典は色

色に教へてある。

その中に「火遠理命（ホフリノミコト）天皇行（ギヤウ）」の傳へがある。

けれども古典の大半は神話の形式を採つて居る爲に、讀者が兎角その眞意を見落しがちである。

「ホフリノミコトは シホツチノオチの カガミノフネに

のり タマの ㇿドに はいられた。そのㇿドは タマばかりで、そのタマの ひとつひとつに ヒがもえてをる。

その（ヒ）は永劫不滅の日で 不断起滅の火で 極大無限の零で 極底最下の氷で 無盡無量の一である。

従つて是れは唯一で 無限で 最大で 最小で 無で 有で 空で 実で 大宇宙と呼ぶるのである。

今その（ホフリノミコト）が タマのㇿドに はいられた」とあるのは（箇躰が箇躰の中に入

つて見れば（ヒ）であつた」との意味で（本来の我を覺り來つた）ので（極）を明らかに得たのである。

その（極）を明らかにすれば、あや奇（クス）しくも あや畏くも アマテラスオホミカミツキヨミノミコトタケハヤスサノヲノミコトにてまします。

斯く悟證し給へるは、（神の獨子（キリスト））則（神（エホバ））である。

神の子が此の土に在るは 神の國を築き成さんが爲である。是う云ふことで火遠理命には 火火出見命（ホホデミノミコト）として天皇國築成の神業をとられたことと拜承しまつらるるのであります。

三つ粟のその中粟の粟の實のあや美しき裏表かな。

その（ヒ）が永劫不滅の日だと云ふのは、萬有本来陰陽不測の神（シン）だと云ふことで、則〇で凹凸で天地で卑高で神魔で、その不二なる躰であり用であるとの意である。

不斷起滅の火だと云ふのは、人の目には有るとも見えぬ中から燃えて燃えながら、また鎮まつてまた燃えて、有るとも無いとも判別し難くて、萬有を焼き

盡し、萬有が成立しつつまた壊滅しつつ連環の端無き球であるとの意である。

極大無限の零だと云ふのは、萬有悉皆崩壊を免かれぬから發き發いて空しきに歸するのだとの意である。

極底最下の氷だとは、八寒地獄の釜の底を打ち割ればまた分割することの出来ぬ極微であるとの意。

無盡無量の一だとは、流行轉換して極り無き時間と空間との中に各自各自の極限を示して居るとの意である。

此れが有るから人は此の中に人相應に「極」を明らかに、その神を拜することが出来るのである。

その極を明らかに得た時に「我は神の獨子である」と體得悟證するので、之れを「神の人」なる「基督」と讚美するので、それは太古以来、中央亞細亞以西の地に行はれた「十字架」の信仰で○（カミノヒト）だとの義である。

エスは身を以つてそれを悟證した神人として名高い一人である。

以上

昭和二十一年十二月二十一日
多田雄三山谷 敬白

2017.12.5.

叙稿「来」(一) より

零 — 極大極小の → 万有は空に帰する との意。

氷 — 極底最下の → (E.は) 分割できぬ極微である、
との意。一 — 無尽無量の → (個々の上の)
それぞれの極限を意味する。火 — 不断起滅の → 有とも無とも判別のできぬ上の
生滅が、連環を成して
端なき球のようであることを意味
する。

上三つはコアマツカミの形容。

下二つは両方をまとめた形容。

る。之れを、

人の世では「聖」と呼ぶ。則、「カミ」である、我の内に拝む神であると共に、内外不二に拝みまつる「天皇」にてまします。

カミノイソチハヘテモサシ
聖 寿 無 窮。

之れは単なる讀へ辞でも祝ひ詞でも希望の詞と云ふのみでもない。まことに宇宙の事実で真理なのである。太古以来、その聖なる人類は此の事実を明らめ得て、此の真理の上に国を建てたので、それは「神聖國躰」であつた。

その国は穢れ無ければとて「土」と書き「穢土」と區別したのは注意深き支那文字の成立である。形に書けば○である。或は□とも描く。之れを日本語ではアマと呼ぶ。空なのである。「天」であり、「海」であり、「女」である。

「ア」は発き発いて、果て無く限りの無いのであり、「マ」は円満具足であるから、「アマ」とは大宇宙の義で、都べてのものの産出者で、祖である。則、母胎で空界で零境である。之れを「イヘ」と呼ぶ。

此の○には不断起滅の火が有る。その火の燃ゆるを見て、○の中に一点を点ず。則、○である。「いへのあるじ」で「光」である。「不断起滅の火」であるから即「一点不滅の火」である。

一点不滅の火は、則、無尽無量の水で、それがそのまま無際無涯の身であり、身も無く境地も無い心である。それは身でもなく水でもなく火でもなく心でもないところの○であるからとて、古老は、

ヒツミヨイムナヤコト
一二三四五六七八九十と称へて、円満具足の箇躰だと讚美したのである。

日本天皇道

多田山公秘稿

籠居幾歲花開落

今日不知來時路

昭昭琅琅一圓一音之眞。

八雲琴搔き鳴らしつつ君が舞

ふ祕神事を神ぞ知るなる。

あちめあちめあうを。

以上

昭和十一年八月十五日

筑波嶺の影面白き青田かな。

昭和八年二月十八日。

籠居閉門鷺城上。

今日廻顧似夢。

烏兔勿勿一千二百七十九日。

祖神垂示齋事之神業天祖傳授

祭事之密儀。

昭昭記得壹百六十三行。

之是日本天皇道即是神籬磐境

傳即是天壤無窮神道又是十字架

上基督又是皇天皇土天命又是西

方阿彌陀佛刹土又是天國即是樂

園即淨土。

哲人傳承之一圓相又是一音響

即是日神。

日神者建速須佐之雄而月夜見
月弓月讀命也矣。

阿知米於於於於。

以上

昭和十一年八月十九日

昭和八年二月十八日。

我來りて鷺城に駐まる。

廻顧すれば早くも一千二百七

十九日を経たり。

祖神垂示の齋事完了、天祖傳

授の祭事具備矣。

日本天皇宣布の政治は如何。

我は知らず。

位置を知らず、時季を知らず

身心を忘れたるの君。

必竟妖魔擾亂の具たるべきの

みなることを。

以上

昭和十一年八月七日

夜半

綿津見神。

今時人皆遺忘失念。

古傳昭昭存於典籍矣。

伊弉諾尊詔曰吾與汝矣。

廻天御柱而行逢媾合。

如此約束曰。

汝者自左吾者自右廻逢。

約竟分巡天柱同會一面矣。

(舊事紀)

天御柱を行廻るは國御柱。

國御柱を行廻るは天御柱。

國御柱とは、陰にして、女に

して、雌にして、凹にして、坤

にして、地にして土。

天御柱とは、陽にして、男に

して、雄にして、凸にして、乾

にして、天にして火。

國御柱を旋七重。

天御柱を旋八重。

之れを水波能賣の神徳となす。

ひさこ

水蛭子。入葦船而流也。

あはしま

淡洲。亦是不入子例也。

子にあらざる子。

(云云)

先產生淡路洲爲胞。

產生て胞となすとは淨地沃土

を築きたりとの義なり。

生月神號曰月讀尊亦云月夜見

亦月弓。

其光綵亞日可以配日而治故奉

送于天。

次生素盞男尊。(云云)

次生蛭兒。

雖已三歲而脚尚不立。

初二神巡柱之時、陰神先發喜

言。

既達陰陽之理。

所以初終生此兒矣。

次生鳥磐椽樟船即以此船乃載

蛭兒流放棄矣。(云云)

其磯馭盧嶋者非所生亦水蛭子

與淡嶋不入子例。(云云)

泉津日狹女將渡其水矣。

云云。

黃泉雷軍皆悉逃還矣。

よもつひさめ。

よもつひさめ。

舊事紀に黃泉津醜女云云、突

如として黃泉津日狹女云云と記

す。

兩者の異同に迷ふ。

醜女は醜惡邪局の極なり。

日狹女とは水雨にして、萬葉

集に霽霖と載せたと等しく火

雨なり。

和名抄にはヒサメは霽にして

大雨なりと云ひ、日本紀私記に

大雨をヒサメと記せりと雖、ヒ

サメと云へるをヒサシキアメと

思ひ誤れるものにして、ヒサメ

が神言なることを知らざるが爲

なり。

ヒサメは水雨なると共に霽雨

なり、靈雨なり、魂雨なり、日雨なり、火雨なり、○雨なり、雨なり、◇雨田雨□雨□雨なりにして、伊頭雄走なる皇雨なり、日土光線にして日神の神徳なる光なり。

黄泉津日狭女とは八種雷神にして、天魔地妖の神化したるものなれば、ムラクモノツルギなり、ヤサカニノマガタマなりにして、

ヒサメ。

ヨモツ。ヒサメ。

ヨモツヒサメ。

にして、六音二言一語の神言なり。

ヒサメニフレバと云ひ、シロヘノコロモと云へるにて、ヒサメがナガアメにあらず、オホノメにてもあらざることを知るべきなり。

ナガアメに降ると云はれざるは固よりなると共に、シロタヘノコロモが白く光を形容したることを思ひ合せなば、火雨なり小雨なり、零雨なることを知らるべきなり。

ヒサメ即、ミヅ即ミイツ即天の水即経の水即天眞井の水なれば、ミモヒにして、天狭霧にし

て稜威なり。

神の靈にして○なる點なり。

點無きの點なり。

故に、伊弉册神の築き成したる高天原にして、天御中主神の統治する天御中主大御神なる皇土なり、天照皇大御神なり、月讀命なる夜食國なり。

以上

アチメオオオなるなり。

アマテラシマシマススメオホ

ミカミにしてアマテラススメオホミカミにましますなり。

アアヒガテンジンユウアイコ

ウなるなり。

ハルヒヒメハルヒヒメハルヒ

ヒメ。

アアヒガテンジンユウアイコ

ウ。

以上

昭和十一年八月十七日

夜半

大日本祓禊所神納官白

ひふみよいむなやこのたりやももちちみてり。

あちめおお。

う。う。う。う。う。と。う。

と。う。

うとのかみみや。

うとのみや。

うとのみやしろ。

うと。

う。う。う。う。う。と。う。

と。う。

あるばあるば。

ああひがてんじんゆうあいこ

う。

う。う。う。う。う。と。う。

と。う。

あちめおお。

あちめあちめあすばかすやぞ

さからかすやぞおおおおおお

おおおお。

きくのはなさきたるやどはす

めかみのしらすゆにはとかみか

かります。

ああひがてんじんゆうあいこ

う。

あちめ。

おおおお。

う。

うとのみや。

うとのかみみや。

うとのみやしろ。

うと。

う。

山の井の澄みたる見れば天地の神の心のやどるとぞ知る。古のまな井の清水汲みて知るヨルダンの流れ世をば救ふと。むらきもの心廣野のうへにこそ大和撫子咲きにほふなれ。

秘傳 日本天皇通より

① まず、幸84頁の3行目には、「ヨモツシコメの实体は、ウジタなし
ヤウカ イカヅラ
トロギたる八種雷である」と述べられているが、一方、この
ヤウカ イカヅラ カミ マガツヒ
秘文では、「ヨモツヒサメとは八種雷神にして、^{マカツヒ}妖魔(天魔也)の
神化したるものである」と述べられている。(拡大版、中段)

つまり、ヨモツシコメとヨモツヒサメは、基本的には同じ实体を
指し示しているのだが、「その実体がマカツヒの状態にあるか、
カミの状態にあるか」によって、使い分けられているのである。
言葉が

(なお、この拡大版、下段の説明は、あくまでもヒサメの説明で
あって、ヨモツヒサメの説明ではないことに注意。)

② また、ここでは、ムラウモノツルギやヤサカニマカツヒの^{ハモツミ}作用も、
「妖魔の神化」とあると述べられている。

(なお、記紀には、月読命と勾玉の関連に際しては一切、言及
が無い。ウケヒの神話とアマノイハヤトの神話を参照。)

一方、秘稿「日本天皇國」においても、^{ヤサカニマガタマ}「八尺勾魂」とは、「妖魔
^{はたき}を調伏して神業に従わせる作用」のことであると述べられて
 おり（5頁、上段）、また、^{ヤサカニマガタマ}「八尺勾魂」の^{カミカカリ}神儀尊容（作用の結果）
 とは、「くらげなす環の國の修理國成」であり、十四字秘言の
^{カミカカリ}神託と同義であると述べられている。（8頁、下）

十四字秘言とは、元々が「神界の築成に努めるコトタマ」なので、
 この点からも、三種の神器のひとつであるヤサカニマガタマの
^{はたき}作用が「妖魔の神化」とそれによる「神界の築成」であること
 が解る。

（ここでは、ムラクモノツルギも同様の存在として表現されている。
 即ち、三貴子のあり方としては、ツキヨミとスサノヲを同格に見る
 「基本形」の考え方が採用されているのである。）

③ なお、この秘蔵の歌を取り下段で言う「イデナギノカミの築と成したる高天原」とは、国生サ・神生サ、よと築かれた境地のことであって、オホミマノハラハ以前の段階を、即ち、「まだ天照大御神が顕現していない高天原」を意味している。

天照大御神はこの境地から生まれるのであって、この境地をそれ自体は、まだ「天照大御神の統治する高天原」ではない。

それは、「^{カリミ}隠身天之御中主神の統治する皇ニ」であり、神もとして、^{アマノミナカマシノオホミカミ}天御中主大御神、^{アマテラスノオホミカミ}天照皇大御神とよばれる。

境地なのである。

^{ツキヨミノミコ}月読命 ^{ヨルノタスクニ}夜食国

という用語は、通常の文脈では、「こうした母胎における資料、およびその活用」を意味する用語なのだが、ここでは、その境地(母胎)それ自体の別名として用いられている。

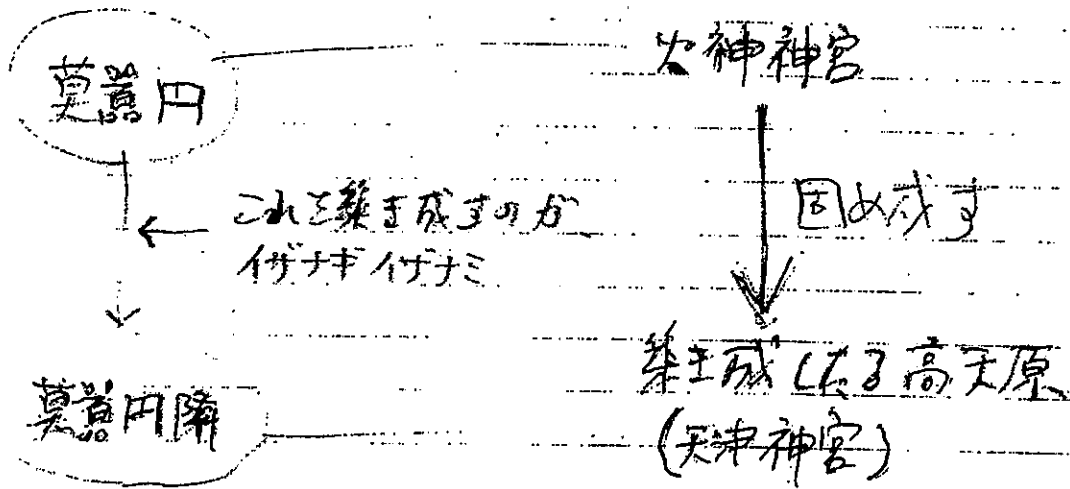
(多分に、例外的な用法であると思われる。)

「後」の主語は何？

「イザナギノカミの築き成したる高天原」とは？

「イザナギノカミ」

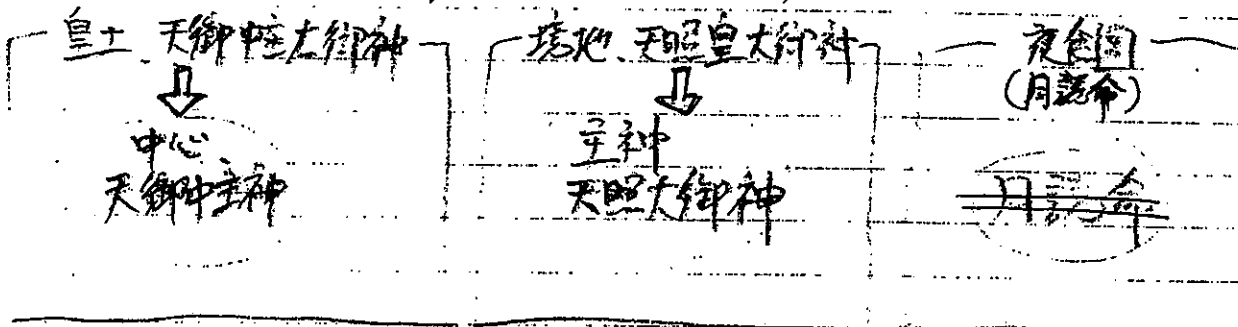
アマツカミ



コトアマツカミの領域 (火神の神宮) から 大宇宙

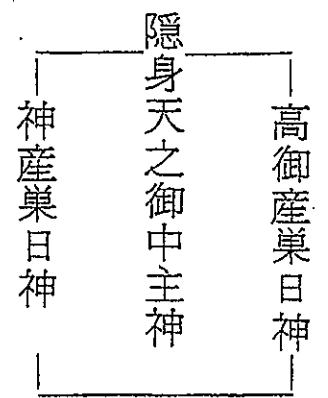
アマツカミの領域 (高天原) を築き成すのもまた、

イザナギイザナミ (天照坐皇天御神) の領域である。

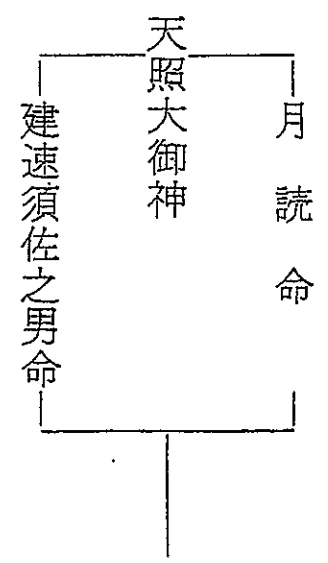


この三つは、別のモノではあるが、同じ形式によって成り立っており、その意味で、「イザナギノカミの築き成したる高天原」と等価である。

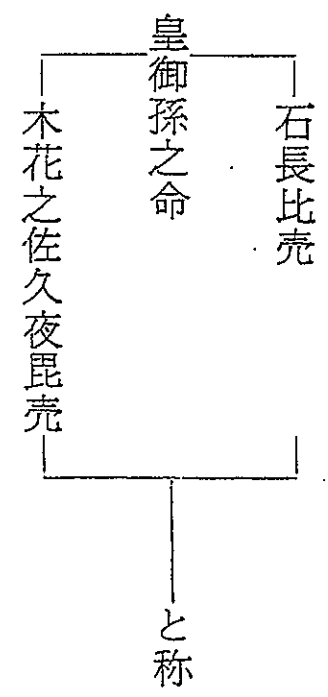
はてしと神の零^ヒ



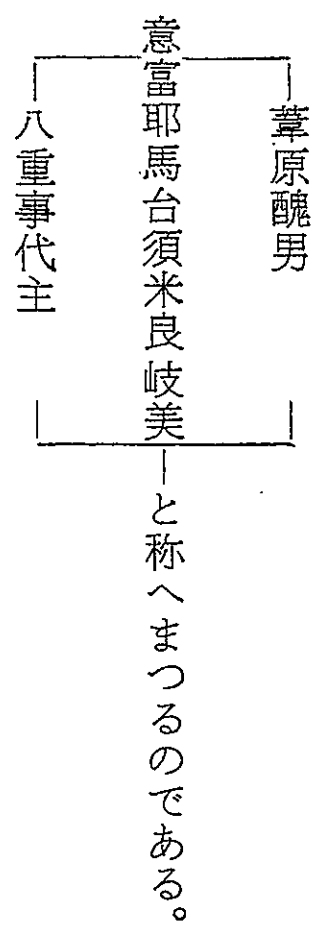
はてしと神の魂^{タマ}



はてしと神の身^ミ



へまつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては



右側の三神はいずれも、

修理(破壊)の作用を司る。

(左側の三神は国威の作用)

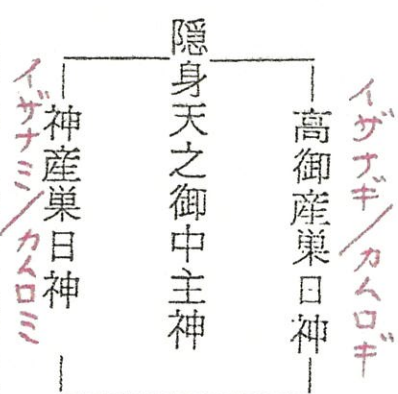
ところがその国は本来神魔包括の^ヒの神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

阿那畏。

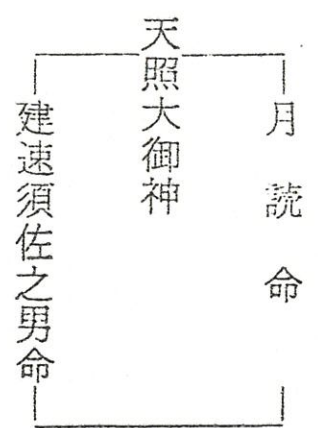
日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしますことと拝承しまつる。

人間世界の波瀾曲折は隠身天之御中主神が神魔の躰にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

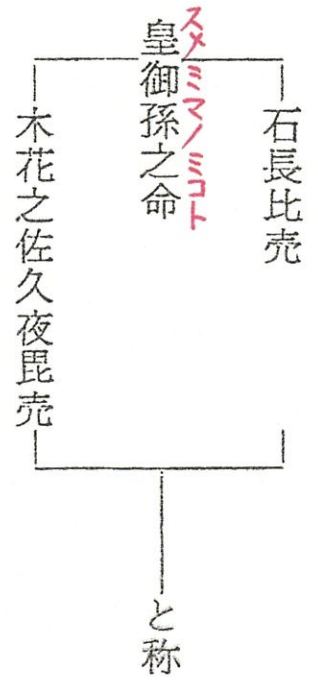
はてしと神の零



はてしと神の魂

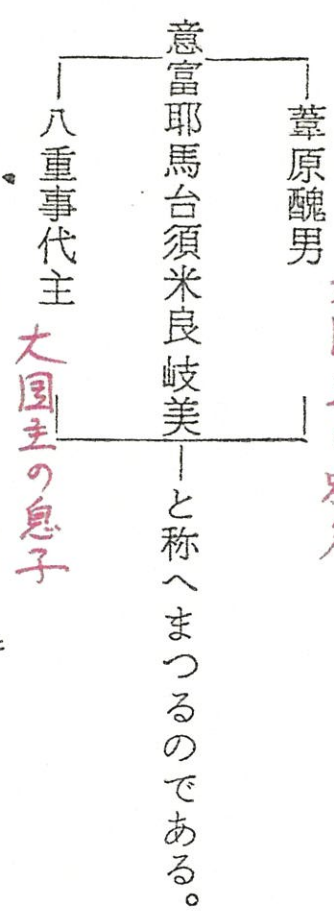


はてしと神の身



へまづるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては

大國主の別名



天皇自身は人間身ではあるが、皇御孫之命の諸力を正しく継承し、「人類世界の中心」として機能することに
 よって、オホヤマトスメラギミと称えられるべき存在となり、
 アシハラシコラとヤヘコトシロヌシの諸力を
 行使できるようにするのである。

ところがその国は本来神魔包括の○の神であるから時あつては神とも成り魔とも変わるので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五宮的に拝みまづることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。アシハラシコラは生大刀・生弓矢で八十神を
 阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしますことと拝承しまづる。
 ヤヘコトシロヌシは話ままとあり、などの
 國成の諸力。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の軀にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

生身の人間である天皇が、

(ヒトノカミ)

オホヤマトスメラギミとして

機能し得るのは、

(ミタマノカミ)

即位儀礼によって、

スメミマノミコトと一体化し、

(ミノカミ)

その諸力を体現するからである。

未来250頁より.

^ヒ ^{カミ} 零の神 は コアマツカミ と アマツカミ に分かれるが、

アマツカミ は (イザナギ・イザナミに限らず)

実にしばしば 宇宙 (時空) の内側に入り込んで

みずから ^{ツカミ} クニツカミ となる。これが ^{ツカミ} 魂の神である。

裏と返せば、^{ツカミ} 魂の神の多くは「自身の本体」を

無宇宙の側に (アマツカミとして) 保有しているのだが、

もっぱら 宇宙の側で活動しているが故に、機能上、

クニツカミ に分類しているのである。

未来250頁の図表では、^{ツカミ} 三貴子が ^{ツカミ} 魂の神 として表現

されているが、もちろん、「三貴子の本体」は無宇宙の側に

ある ^ヒ ^{カミ} 零の神 (ここでは、アマツカミ) である。

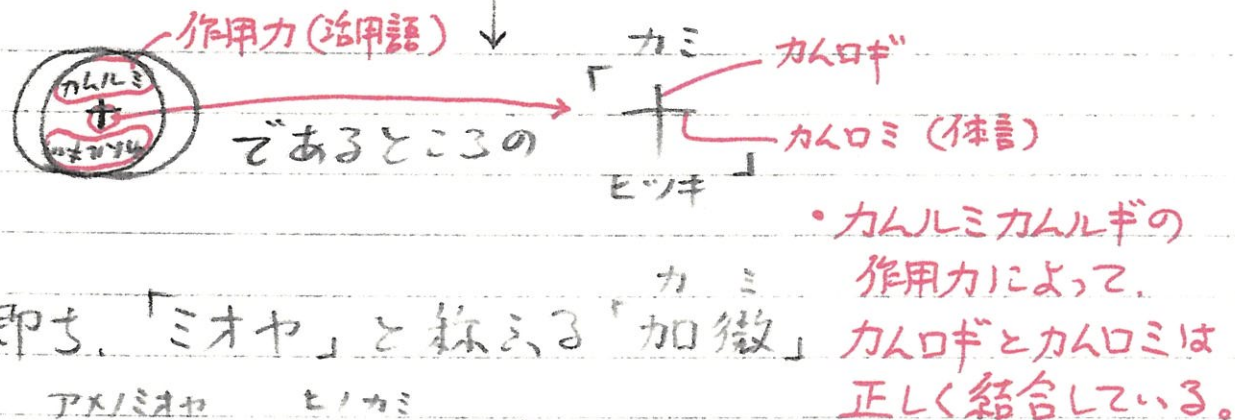
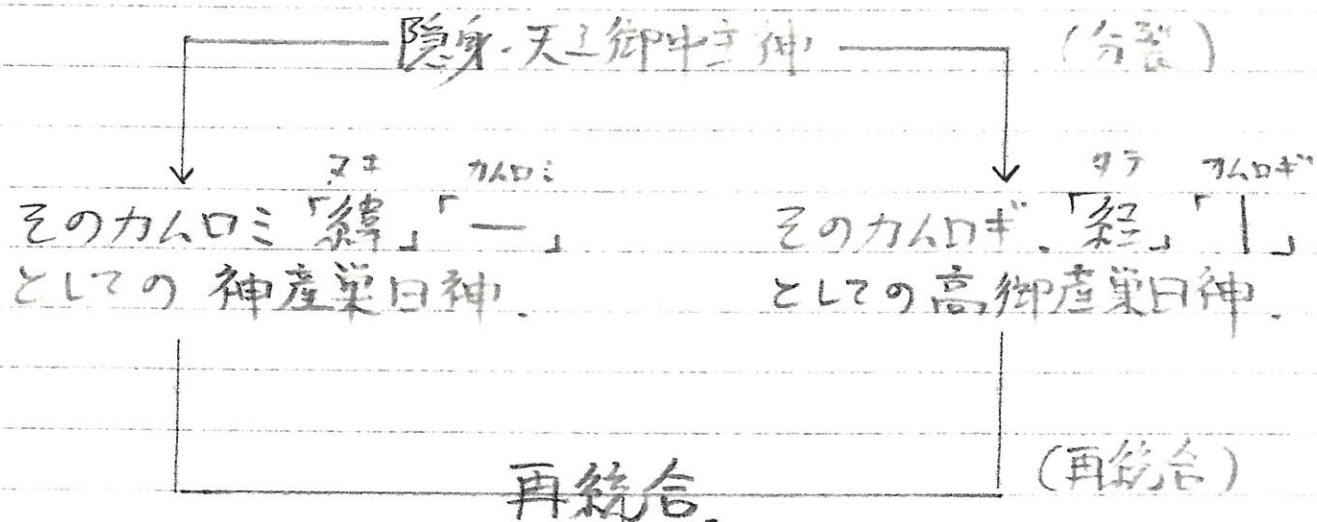
^{スミツノミコト} 皇御孫之命 も ^ミ ^{カミ} 身の神 として表現されているが、全く同様に

その本体は ^ヒ ^{カミ} 零の神としての御生誕」をされた神である。

未来250頁の図「ヒノカミとしては」の説明

未来230

『その「^{カミ}十」と結び結ぶ（元としての）^{ヒノカミ}隠身』



即ち、「ミオヤ」と称ふる「加^カ徴^ミ」
⇒天祖^{アノミオヤ} や 日神^{ヒノカミ} を意味する。

典型的には(ヒノカミとしての)天照大御神

→ 基本的には『こうした「二つのもの」への分裂と

その再統合』というプロセスを経て、ヒノカミ→タノカミ→ミノカミ
と「組み直されて」ゆくのである。

^{くにみづ}

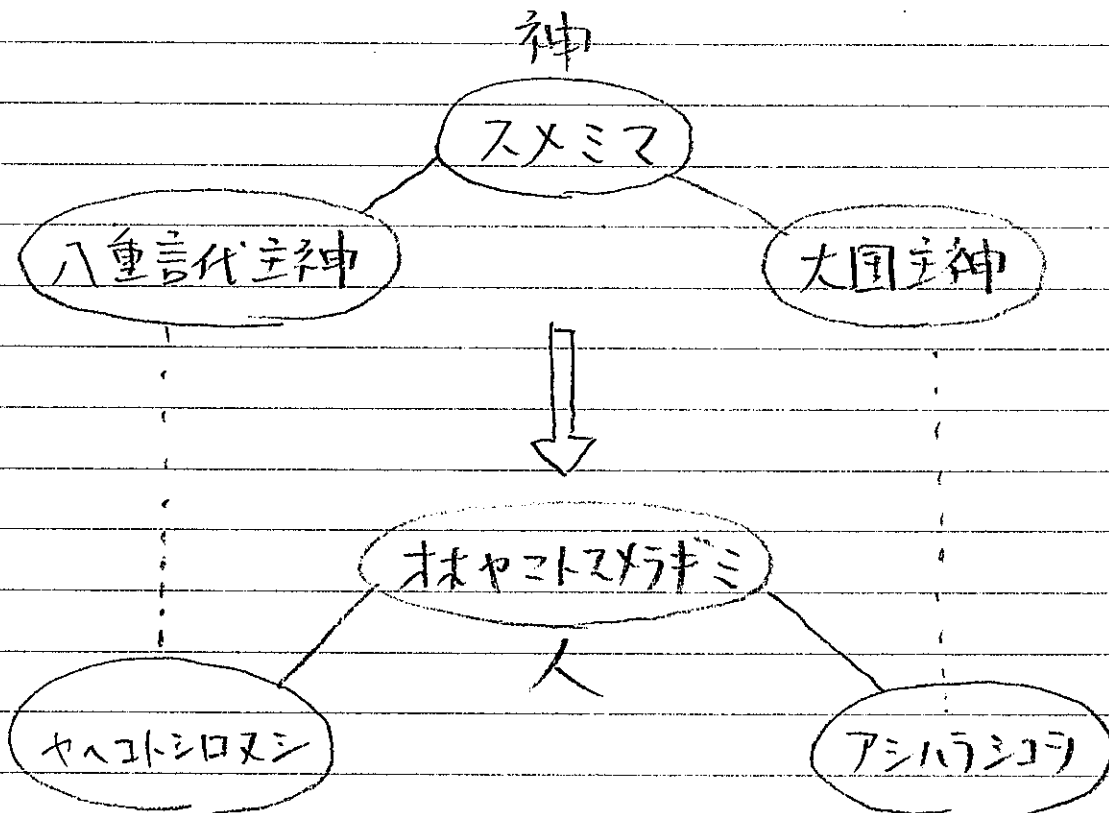
天孫降臨の神話で、実際に^{くにみづ}国譲りをした「主体」は、

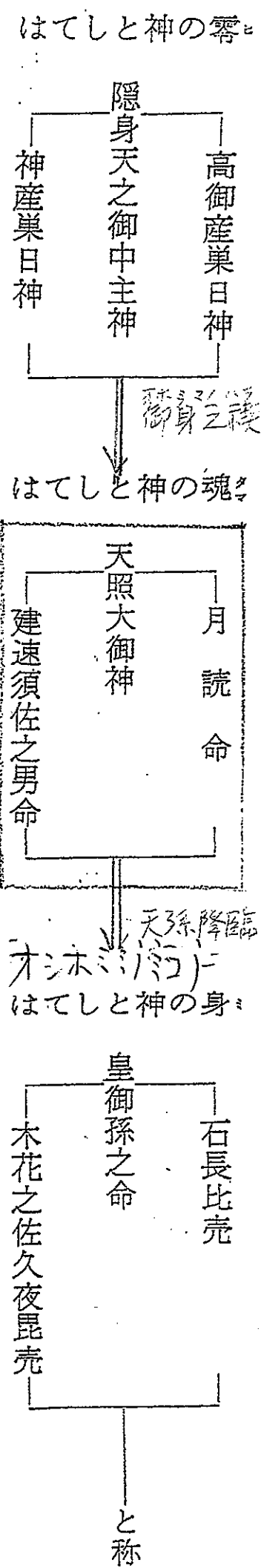
大國主神（葦原醜男神）とその御子、八重言代主神である。

これに神習^{かみなづ}り、オホヤマトスミナギミ（即位儀礼によって、

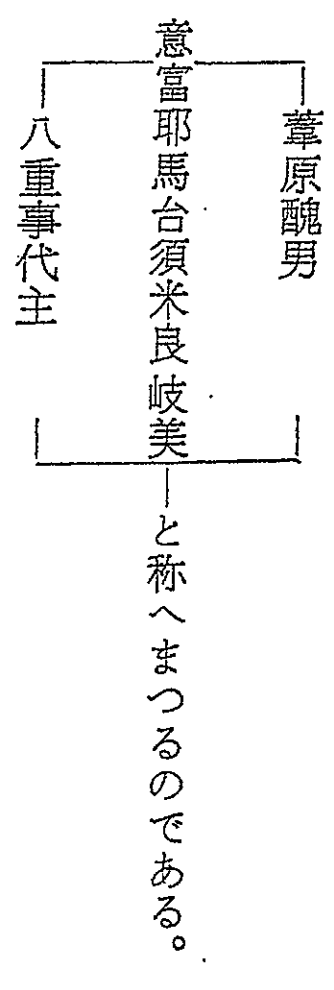
スミミマノミコトと一体化したところの天皇）は、

アシハラシコヲとヤハコトシロメシの^{さか}作用力を司るのである。





まつるが如く經に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界
神としては



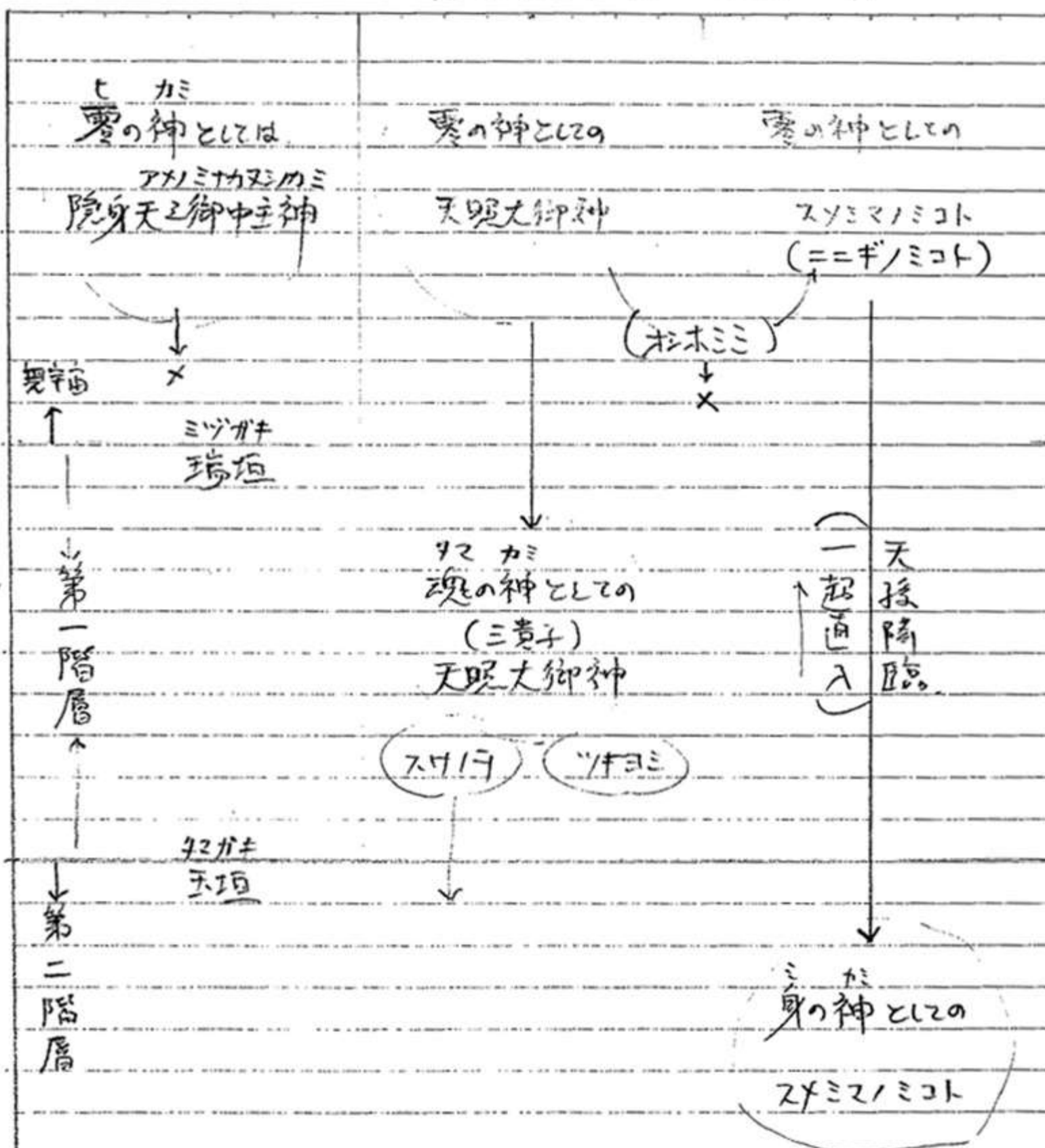
ところがその国は本来神魔包括の○の神であるから時あつては神とも成り魔とも變るので人間の波瀾が其処に
る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官
に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。

阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御
つはしますことと拝承しまつる。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の躰にてまします為の活用變化なのである。之を数として見れ

一 母したるカニ (天来250)



以上をまとめて、受け止める人間が、オホヤマトスヤギミである。

日本民族が日本語としての神言靈^{カミノコトタマ}を忘れ佛教が傳ふところの阿彌陀佛音を唱ふるもののみ多きが如く基督教徒が正しき神言靈^{カミノコトタマ}を傳へながら之れを奉唱することを知らずして反って禍津毘の禍言を唱へつつあるが如く各國各民族は相率ゐて分裂分散に走り下向轉落しつつあるは悲しむべく憂ふべきの甚しきものである。

たまたま言靈を云ふ者はあつても全音義の何たるかを忘れて居ること柿本人麿をはじめとして近時の言靈學者と称するものの皆然るところで為に却つて甚しき謬見邪説を出して世を毒し人を苦しめて居る。

布留邊^{フリュウヘン}由良^{ユラ}ふるべゆらと古典に載せたのは斯のような禍津毘^{マガツビ}の禍言を指したので之れは五音二言の禍言靈である。これに由^ユ良^ラ止^シ袁^{エン}布^フ留^{リュウ}邊^{ヘン}の七音を加へて布留邊由良

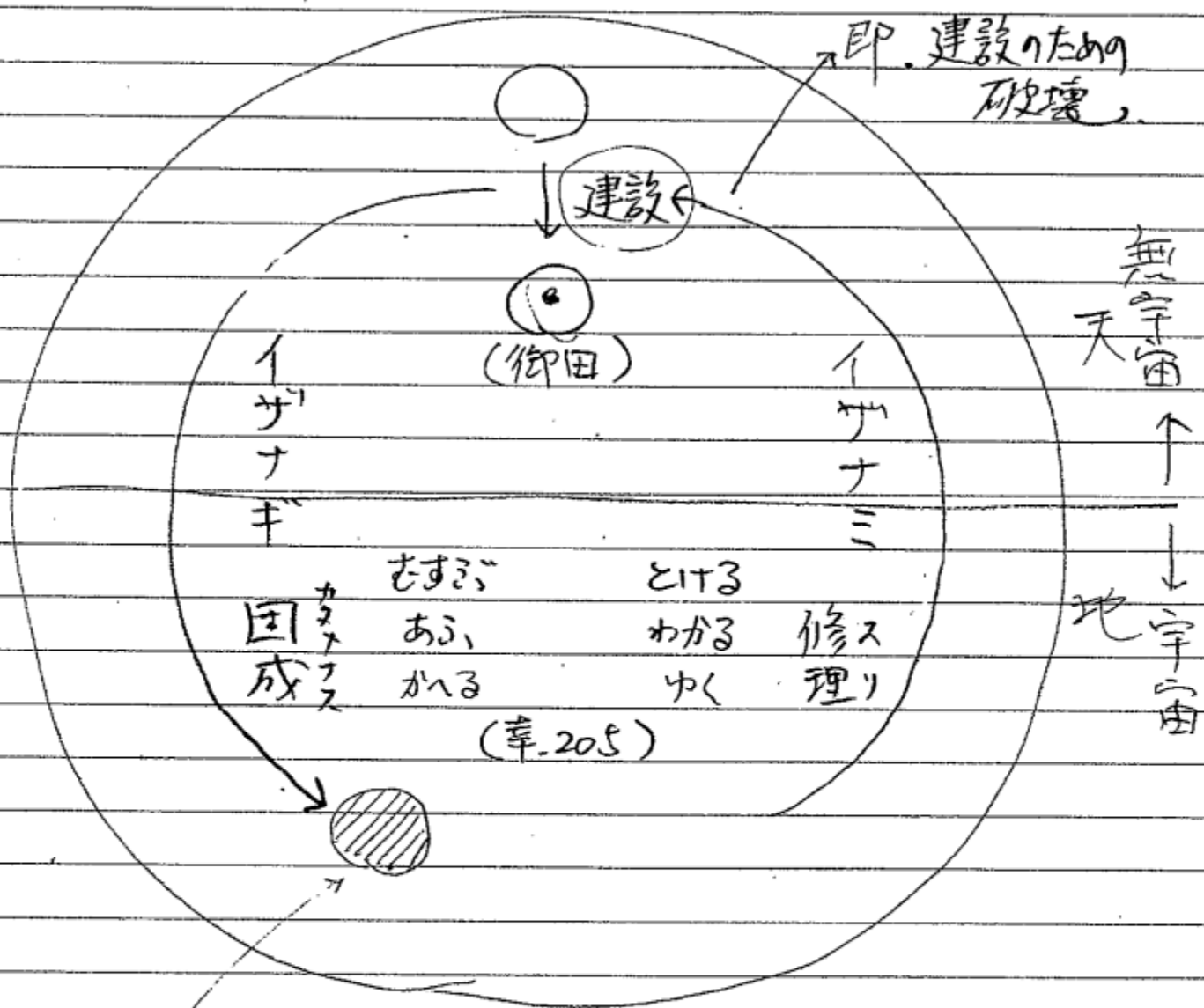
由良止袁布留邊の十二音三言と成す時は禍津毘調伏濟度救出の神音^{カミノコトナ}と化るので阿三忙銀^{アサマギ}儺^ニ吽^{ウン}吽^{ウン}尾^ビ觀^{カン}南^{ナム}の音は禍言であつて阿三忙銀^{アサマギ}儺^ニ吽^{ウン}吽^{ウン}尾^ビ觀^{カン}南^{ナム}吽^{ウン}但羅^{タラ}吽^{ウン}悍^{カン}漫^{マン}の音は佛言で禍津毘たる六種外道を調伏し濟度し救出するの祕言密語であるとの秘言靈で神直靈の神言である。

布留邊由良由良止袁布留邊
ふるべゆらゆらとをふるべ。
ぬなとももゆら。

浅間山人こそ仰げ眞賢木の綠色濃く照りにぞ照りたる。

資財を用ゐず材料無しに事業の成立つと云ふことはない。不正不美不善なるが如きも一切は命である天命である。

之れを使用するは直日^{ヒト}であり神直日^{カミノヒト}であり直靈^{カミノカムツナ}であり神直靈^{カミノカムツナ}であり神日本^{カミノヤマト}磐余比古^{イヘヒコ}である。之れを阿知米^{アチメ}阿知米^{アチメ}於於於と教へられてある。



「イザナギノカミの神業の成り成りたる時」

「天地は存在の尽る統一りにたふ」といふ状況

アツク アリ エトゴト ミスル